

## 八代層（下部白亜紀）について

熊大・教育 小田 修

私は、第1図の枠内に示す地域の地質調査を行なったが、ここでは八代層全体について簡単に述べる。八代層については、松本・勘米良（1962）の日奈久図幅で詳しく述べられている。

八代層は、下部白亜紀・宮古統上階（Albian）に対比される層厚約 680 m の累層であり、球磨山地の日奈久帯と宮地帯にわかれて分布する。本層は、日本における下部白亜紀の最上部に当り、多種の浅海性の二枚貝化石を産することと、基底の不整合が佐川造山運動の主要時階を示すことで重要である。

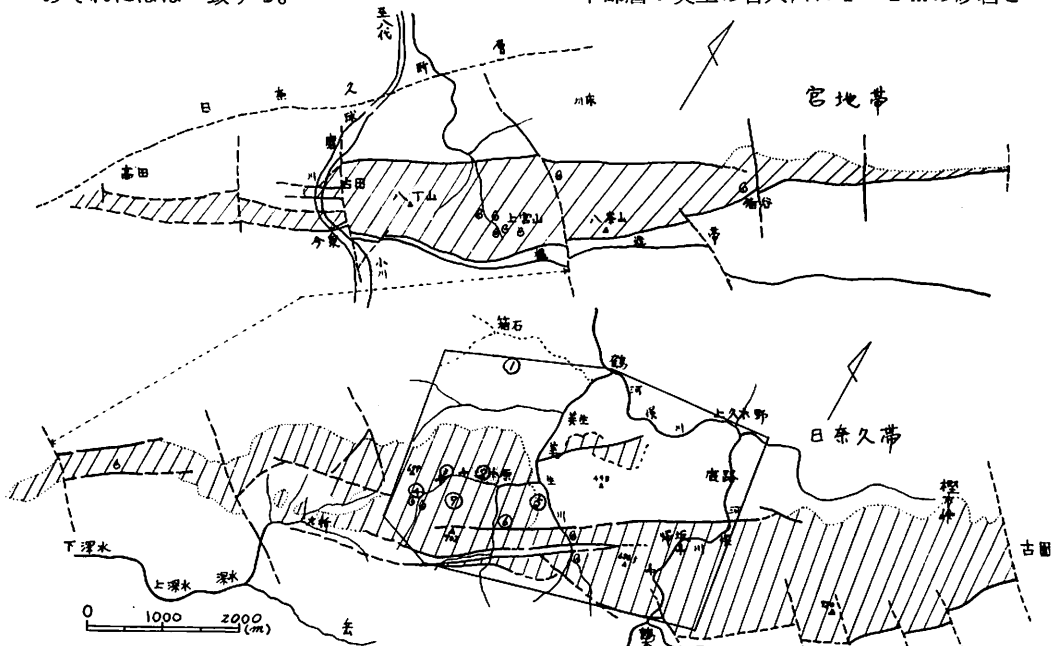
模式地は、八代郡東陽村鶴の南方 1.8 km の美生付近であり、一般に山地の脊梁部に主な露頭が見られる。本層は、日奈久層（宮古統下部）の示す向斜構造を切って傾斜不整合に重なり、 $10^{\circ}$ ～ $30^{\circ}$ の緩い傾斜でそれ自身も向斜構造を示す。向斜軸は、下位の日奈久層のそれにほぼ一致する。

宮地帯の八代層は、約 200 m の厚さで本層の中部～上部層に当るとされ、日奈久帯の八代層と同様に山の高所に分布する。そして、岩相及び岩質が模式地のものと少し異なる。上宮山付近には化石産地が 5～6カ所あり、猫谷付近にも産地がある。猫谷と朴ノ木谷の上部白亜紀の宮地層（ギリヤーク統）とは不整合関係にある。

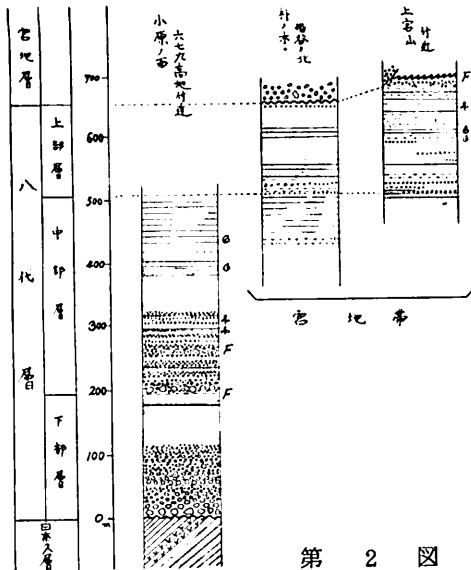
日奈久帯の八代層は、八代郡東陽村小原付近において 1.8km の最大幅をもち、坂本村下深水北方の山稜部や東陽村鹿路・帰坂・鶴木場をへて、泉村古園付近まで延長 13.5km の間に WSW-ENE 方向の帯状に分布している。しかし、下位諸累層の示すような顕著な帯状分布ではなく古期岩類をおおように分布し坂本村九折の北西や東陽村美生の東方には島状にとり残された部分がある。

美生の谷入口-小原-小原西方の 679 高地に至る谷及び支谷には典型的な露頭がある。厚さは 480 m 以上に達し、岩相により下部層と中部層にわけられる。

下部層：美生の谷入口に 1～2 m の砂岩と



第1図 凡例①調査地域 ②赤紫色岩 ③植物化石産地 ④動物化石産地 ⑤不整合 ⑥断層 ⑦八代層を示す



第 2 図

頁岩の互層中に3層の凝灰岩を挟む日奈久層（中部層最上部）の上位から傾斜不整合に塊状の基底礫岩がのり、硬く暗灰色砂岩へと移る。厚さは約190mである。

中部層：小原付近で下部層の暗灰色砂岩の上位に26cmの大礫を含む赤紫色礫岩がのる。その上位から、中粒～細粒礫岩・砂岩・頁岩の小堆積半輪廻を数回くり返す部分（頁岩から植物化石を産する）をへて、砂岩、砂岩・頁岩の互層（動物化石を産する）、頁岩に至る半堆積輪廻を示す。

模式地の東方、鹿路・埴坂・鶴木場付近では、模式地の中部層下部（植物化石を産する部分）約60mが450mに達するなど近距離にもかかわらず岩相変化が大きい。このことは八代層基底の不整合、粗粒の岩相や赤紫色岩と共に、佐川造山期の堆積物であることを物語っている。

#### 参 考 文 献

- 小林貞一（1951）：日本地方地質誌総論、朝倉書店。  
 松本達郎・勘米良亀齡（1952）：球磨川下流域地質巡検案内書。  
 （1962）：5万分の1日奈久図幅。